まつりの人・紹介（９）

福持（ふくもち） 昌之（まさゆき） 氏（京都市文化財保護課技師）

1990 年に立命館大学文学部日本史学専攻に入学された福持氏は、在学中に藝能史研究會に通い始めたことで学問研究に魅了され、奈良県立高校の日本史教諭の採用を辞退して京都教育大学大学院（社会科教育専修）へ進学。修士論文では「中世寺院社会における僧侶のライフコース」をテーマとされた。滋賀県・京都府の民俗芸能緊急調査への参加を契機に祭礼行事研究へと関心が広がり、帝塚山大学大学院の博士課程で民俗学を専攻し、全国の「奴（やっこ）行列」の調査研究に取り組まれる。満期退学後、滋賀県の愛知川町史編さん室で学芸員として、古文書調査や民俗調査に加え建造物や仏像の調査にも従事。愛知川観光協会事務局長へ転身後は、地域の歴史文化を生かした地域振興と協会の収益改善・活性化に尽力され、2008 年発案の「のれんアート」は恒例行事として現在も続く。そして 2009 年 6 月から京都市文化財保護課の専門職員として祇園祭や五山送り火など民俗文化財の担当をされている。

こうして祭礼行事を支援する立場になった福持氏は、自らもまた、高校 3 年生だった 1989 年 3 月以来、奈良・薬師寺の「修二会」に奉仕されている。結願日の鬼追式で鬼役を務め、国立劇場や大阪フェスティバルホールなどで開催された薬師寺声明公演では堂童子役として舞台にも立たれた。2023 年からは東大寺「修二会」お松明の奉仕もされている。京都市の採用面接では「無形民俗文化財の多くは、職業としてではなく、個人が時間をやりくりすることで支えている。保護・振興を支援する立場の者が『仕事が忙しいので修二会の奉仕は止めました』とは言えない。」と奉仕を続ける意思を伝えた上で採用されたとのことだ。「毎年 3 月 31 日に休暇をとる公務員は珍しいが、私にとっては身を引き締め初心に還る良い機会」と語っておられる。

昨今の少子高齢化や生活様式の変化は伝統行事にとっては逆風だが、福持氏は「世代交代が進まない」「後継者がいない」という声を聴く中で「続けていくことを負担に感じるか、楽しみや生きがいと感じるかは人によって違う。若い世代は『教えてくれないと分からない』と言う。ならば多くの人に魅力があるものとして知っていただくのが肝心」との結論に至ったという。その発信のため、2018 年からの 4 年間、『京都の祭り・行事』（参考 1）の普及啓発事業に携わるとともに、(公財)京都市文化観光資源保護財団の協力も得て、伝統行事･芸能記録等の記録映画を Web サイトで公開する「京都の歴史と文化 映像ライブラリー」（参考 2／右下 QR）を企画された。また、P6 にご講演要約を掲載した「京都五山の送り火映像ライブラリ」（右 Web サイト TOP 画面）など、映像記録の新規制作にも尽力されている。

福持氏は「無形民俗文化財の保護には、基盤となる社会の維持継承が欠かせないため、まずは住民自身が地域活動に 30-40 代の勤労世代、そしてその家族を巻き込んでいくような工夫をしてほしい」と語る。そのうえで「公務員は 30～40 年で定年になるが、それよりも先、それこそ自分の死後までイメージして仕事をすべき」と考えておられる。そのような福持氏の想いには当会関係者も共感するところが多いのではないだろうか。

（得能 司 記）

参考 1　京都の祭り・行事　https://kyoto-bunkaisan.com/report/tyousa04.html
参考 2　京都の歴史と文化 映像ライブラリー　https://www.kyobunka.or.jp/library/

＊福持様の論文等は researchmap（https://researchmap.jp/read-945021?lang=ja）に一覧が掲載されており、同ページで閲覧できるものも多くあります

また、2022 年 4 月発行「まつり通信」第 4 号 P2・3 に「京都市の無形民俗文化財登録制度」に関するご寄稿、同 P8 に「京都の剣鉾差し」に関するご講演要約を掲載していますので、併せてご覧ください